

毎日歌壇

水原 紫苑 選

生年と没年しんとつなぐやうに空ふかくから
落ちてくる雪 見附市 有村 桔梗

△評▽生年没年、いずれも抽象に過ぎない
二つの時が人間存在に結びつけられる不思議を、雪という自然現象が開示する。

二級河川にしゃなりしゃなりと雪の降る割れ
物めいた透明感で 横浜市 永永 キヌ

△評▽こちらの雪は初めから人間的なこび
をたたえている。二級河川も味わいがある。

波というちいさな不安をもて余し絵本の中の
汽車でゆく 横浜市 大原 香花

本棚の奥に青空がすよよに抜きとってゆく
在庫の整理 帯広市 小里 京子

ひとつつわれの林檎を取り出して嘘がない
かを確かめてゆく 千葉市 小金森まき

どんな火もひとの匂いをさせているうまれか
わりの痣のかわりに 花巻市 永汐 れい

億年を旅する光億年を遮るものなき宇宙
霧島市 秋野 三歩

みじめさを塗り絵であらわすわたくしの目の
充血に咲きしヒナゲシ 東京 奥山いずみ

ものがたりはわたしにもどる金色の眼を青く
して冬のトナカイ 碧南市 江原 冬莉

何者も音を立てない教室でわたしが待たれて
いた声になる 東京 小亀 令子

伊藤 一彦 選

はじめての輪島の夜の炊き出しはトルコ人の
ポランティアとふ 鹿嶋市 大熊佳世子

△評▽震災直後にトルコ出身のポランティ
アたちが愛知県から駆けつけ温かいスープ
を配ったというニュースに感銘しての歌。

若い日は年の暮れさえ旅の宿 能登半島で聞
きし八代亜紀 沼津市 本田 影二

△評▽かつての能登の旅を回想しての歌。八
代亜紀の訃報により悲しみを増しながら。

一日で回った三軒どの店もセルフレジにて人
が恋ひしき 宮崎市 上米良綾子

かなしさをわけあいながら暮らして湯冷め
の素足ひたりとつけて 東京 奥山いずみ

どんくさい吾に似てゐる潮まねき片手のでか
さに弱音をみせぬ 東京 池崎富実夫

人の言う「さもなければ」の言葉には鋭い
刃のような冷たさ 堺市 初夏みどり

クリスマスセールで銃が安い国ケーキの横で
餅を売る国 名古屋市 外山 雪

友の便り・投稿・懸賞 六十三円の幸せは今
後せいたくになる 東京 檀 ゆか

腐敗して酒の肴としてはやや酸味の強い政
治の話題 横浜市 友常 甘酢

BGにフランス組曲流しつ古今集の入門書
読む 上尾市 清水 昇一

米川千嘉子 選

ロボットが千回針を刺さるう二十一世紀の
千人針は 京都市 小池ひろみ

△評▽1000人の女性が赤い糸で一つず
つ玉留めを作った千人針。ロボットなら即
時に仕上げて多くの人を戦争に送るか。

買つてもせよと言はれてゐた「苦勞」給付つ
くめの世に消えてゆく 高崎市 樋浦マサエ

△評▽若い時の苦勞は買つても、は昔の
こと。将来に役立たない苦勞に給付金が。

「でも、それは仕方なかったことだよ」と君
に言わせる私の狡さ 横浜市 友常 甘酢

ガス代を節約するため以前より薄く小さく切
ってる野菜 国立市 佐藤 建

年金を当てに出来ぬと言う娘日本の未来我も
語れず 松戸市 加賀 昭人

駐輪場ハンカチ出して涙拭くサドルも拭いて
もう泣かないぞ 村上市 杉江 正子

六人であんみつ食べて銃弾の夢に起こされり
アルな夢だ 野田市 片倉 伸明

行方しれぬアフガンの子らのカレンダー求め
友らに配るはがゆき 習志野市 太幸 明子

雨の道に転びしわれに降り注ぐ雨より激しい
言葉に打たる 仙台市 小野寺寿子

編み棒に祖母の言葉が蘇る編むときいっぺん
着るときいっぺん つくば市 松井るり子

加藤 治郎 選

特選の夢入選の「夢」そして佳作の「夢」
と落選の「夢」 雲南市 熱田 一俊

△評▽どんな夢だろう。想像すると楽しい。
特選の夢は華やかで幸せな気分。佳作はさ
さやかな夢か。落選の夢はもの悲しい。

ダボツとしたセーターはアウトレットで買ったのよ
ン・ン・ン・夏のあたし 直方市 大石 聡美

△評▽音のはじける歌で、大胆だ。初句「
音の破調はセーターの感触を表している。
鼻唄り泣いているのね真夜中を電話越しでは

抱きしめられない 川崎市 松永 渚

新機種は電話に掃除機ついていて吸われて消
える私の時間 静岡市 海瀬安紀子

珈琲の甘味が増して冬は来るタートルネック
の薄暗かりに 京都市 小川 ゆか

チャーハンのチャチャカチャカカカ音を聞けば
お玉が北の星座に見える 摂津市 石少山裏裏

ロボットの口をロボと呼んでいた頃のこと
ころがきらきらとした 松原市 たりりずむ

終わらせてくれたよかった シーグラス今日は
たぐさん持って帰れる 大津市 世田 夏雪

冬の月光におびえることのない白樺の眼は死
後も閉じない 花巻市 永汐 れい

南から風が吹いている日曜のショートケーキ
にさみしげな崖 さいたま市 雨谷 詩穂

投稿規定

はがき1枚に
選者を指定し、
未発表の自作を
2首・2句まで。住所、氏名、年齢、
職業、電話番号を明記し、宛先は
〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞
学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選
者名)係へ。毎日新聞デジタルの投
稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けて
います。
他媒体との二重投稿や、同一作品
を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削する
ことがあります。
入選作は毎日新聞社の電子メディ
アやデータベース、アプリ「俳句て
ふてふ」で公開し、本社が作成また
は許諾した出版物やメディアに掲載
することがあります。